

井深対談

赤ちゃんのみがき方教えます

ゲスト： 久保田 競
久保田 カヨ子

久保田 競（くぼた・きそう）

京都大学教授、医学博士。

現在は犬山にある、京都大学霊長類研究所長として、サル
の研究にいそしむ。

大脳生理学者。

久保田 カヨ子（くぼた・かよこ）

久保田競夫人。若くして、当時学生だった競氏と結婚、二
児をあげ、ユニークな“能力をみがく教育”を実践した。

“赤ちゃん教育”（リヨン社）は夫妻の共著である。

母親こそ子供の能力を知る

本日は、久保田先生にはいろいろと専門的なこととお話していただき、また奥様は子育てのベテランで、ご自分のお子様を二人お育てになった後、官舎の若いお母様方の相談にずっと乗ってらして、そういう意味では現役でいらっしゃるということで、ひとつそこいらでお話していただきたいと思います。

カヨ子 私は生後三、四カ月ぐらいから、反射のときに、いろんな働きかけが必要だと思うんです。

井深 非常に重要な時期ですね。

カヨ子 そのときにもし赤ちゃんの能力に差があるとすれば、生まれたときにグーで出るか、パーで出るか、手をギュッと握りしめてグーで出てきた子は、親が運動の働きかけをするのが非常に楽なんです。しかし、パーで出た子はやりにくい、そういう差が起こってきますね。

井深 差は胎児のときからだんだんに積み重なったものであると思うんですよね。

カヨ子 そうですね。

競 それが遺伝的かどうかということが一番問題ですね。

カヨ子 そんなことは、神のみぞ知るところに入っちゃいますよね。

競 いずれにしても、赤ちゃんの能力というものはいままで……。

井深 全然評価されていないんです。赤ちゃんだけではなしに、二歳以下の子供の能力はブラックボックスで、心理屋さんが全然ブラックボックスにしておいて……。

競 医者もそうですね。

井深 一番いいのは臨床のお医者さんの観察だと思うんですよね。

競 それももっと生活の場面で観察しないと、医者はなかなか納得しないですね。先日、おもしろい記事を読みました。タイム誌が赤ちゃんの特集をやりまして、赤ちゃんは非常に能力があるということを強調していました。するとその次の号に読者の投書が出ていて、私の生んだ子供は生まれた日からちゃんと私の顔を見てわかっていたのに、医者は信用してくれなかった、看護婦も信用してくれなかったと。医者は偏見を持って見えていますから、それを信用しない、ちゃんと見てるのに。

井深 心理学か、生理学の本には、一カ月まで見えないとか、三カ月まで見えないとかいうことが堂堂と書いてあるんですよね。

競 書いてありますね。大脳が働いてないなんて書いてあるのもありますよ。

井深 だから、そこら辺を打ち破らないと……。カヨ子さんの本にいいことが書いてあるんだけど、お母さんが創造性を出せるのは育児だ。その重要さというものをお母さんにどうやって知らせたらいいか。指摘されているように、育児の本を見たって、その重要さというものは一つも触れてないんですよね、メンタルな問題に関しては。そこら辺を少し運動を

起こして、お母さんにそういうことを知ってもらわなきゃね。学者さんはだめだから、お母さんに訴えて。なるほど自分の子供は生まれたときからこういう能力を持っているんだから、やりようによってはという。

六感より上の感覚を

カヨ子 ことしの夏、二人水泳を教えたんです。泳げない中学生を。そのときに、「おまえは泳げないと言うけれども、おまえの骨格は平泳ぎに適しているから、絶対泳げます。二日で泳げるようになるから、二日、時間をつくる」と言ったら、ちゃんと二日で泳ぎましたよ。それは一つの催眠術みたいなものですね。

井深 これからは、第六感より上の感覚というものが非常に見なおされる時代に入ってくると思うんです。

カヨ子 絶対そうです。

井深 五感の脳生理学は、競先生に悪いけど、時代おくれですよ。

カヨ子 だから、六感をやらなきゃならん。

井深 六感以上のやつをね。

カヨ子 だから、私が言うのは見当づけだとか、危険を察知するとか、そういうふうな能力を子供にどうやってつけようかということなんです。見当づけだとか、直感だとかいうものを大事にしたい。

井深 それで思い出したが、アメリカでお医者さんの一番の必要条件は人間的温かさ、それからその次が直感力、それから洞察力、その三つで、医学的知識はそのあとのことだといわれている。ところが、アメリカでは医科大学に入るのが一番むずかしいらしいですね。その入学試験を詳細に分析していくと、そういう人の温かさを持っていたらだめだし、秀才でなきゃだめだし、直感力なんておよそないような人が選ばれてお医者さんになる。そのお医者さんになった結果、どういうことになるかということ、人間とは余り関係ない麻酔学であるとか、とにかく人の体を治す、人対人の問題ではなく、学問と闘う人ばかりが選ばれてお医者さんになっているというんですよ。

これは法律屋もそうだ。何とか法の法律論の特別な用語しかわからない人間が、どうして人間が裁けるかと、そういうことになる。だから、これから人間の問題とか、それから少し飛躍するけど、直感力、テレパシーまで含めて本当に考えなきゃならない時代になってくるんじゃないでしょうかね。

競 ところが、そういうのはテストできないですからね。

子供の能力を信じる

ちょっと伺いたいんですが、久保田家の場合、赤ちゃんが生まれてきたときに、ご夫妻

でこんな子供であつたらいいなというようなビジョンをお話しになってお育てになったんでしょうか。それともお母様自身が.....。

カヨ子 私はありましたけど、うちの主人は、当時の子持ちとしては早いんです。まだ学生でしたから。自分のことでいっぱいでした。子供にどうのって、一言ってやるのも無理なくらいだったんです。だから、私は生まれたときに、どういう子にしたいかということをして主人に聞きましたよ。だけど、主人はそんなどころじゃないでしょう。私が一方的に子供が欲しいって、結婚したみたいだから。私が自分の好きなように育てられて、本当によかったと思っています。子供が二十ぐらいになったときに、こんな子のつもりじゃなかったと言ったら、たちどころに離婚だぞと（笑い）。子供は一朝一夕につくられないんだから、小さいときからですからね。

井深 しかし、お母さんにとっては、理想像をそこに描いて育児することは、強く持っていてほしいことだ。

カヨ子 私はそう思っています。

井深 毎日理想像を描きながら、それに向かって、そういうつもりだぞと。かんしゃくを起こそうと思ったら、理想像を壊しちゃいかんわいと思って自戒すればいいんだから。

競 特に話し合ったことはなかったですね。勝手にやられた（笑い）。

カヨ子 こういうときには父親に怒ってもらった方がいいということは、主人に目くばせするからたたくと言うと、そういうときには非常に協力的です。ちゃんとたたいてくれました。

井深 それは二つ、三つになってでしょう。

カヨ子 ええ。

井深 満一年はお母さんのやることに.....。

カヨ子 ベタベタです。私、お乳をいつまでもしゃぶらせて怒られたんです。

井深 乳離れはどうしたらいいんですか。

カヨ子 うちの主人は栄養もないから早く抜けと言いました。だけど、本来要らなくなると、子供が離れていきます。ですから、乳離れを早くしようと思ったら、お乳を引っこめるんじゃないくて、もっと興味のあるものを子供に与え続けられればいい。栄養が悪くなったお乳にしがみついていないです。

井深 そのときにはきっぱりとした独立的な考えをお母さんが持てるか持てないかですね。

カヨ子 むしろ子を離せないお母さんの方が問題です。

井深 だから、大学を卒業してもベタベタですよ。そこはサルのまねをして、突っぱねるといふことが必要ですね。

カヨ子 昔だと、次に子供ができますから、いやおうなしにつき離すけど、このごろは計画出産でしょう。だから、それができないのです。

井深 そちら辺を、大体のめどを与えてあげないと。いつそういう決心をして独立心を.....。

カヨ子 いま何も考えないで、パッと直感的に言うのでしたらお母さんの体の状態によってです

けれども、一年ぐらいはお乳をしゃぶっていてもいいと思います。

井深 私もそれは賛成だな。しかし、それから独立させる気構えをお母さんが持たなきゃ、まずいですよね。

カヨ子 一年だからって、パッと切るんじゃないしにね。徐々に子供の方がこれよりももっと興味を持つものがあるというような.....。

井深 一歳になったらだんだんおっぱいに興味がなくなるのが本当でしょうね。

カヨ子 おっぱいが足りなくなったら、何かで補わなくちゃならないんですよ。そんなことを本能的にやるんです、子供の方が、

競 そうすべきですね(笑い)。ぼくの方は医学的な観点で、栄養的なことだけ言っていたから(笑い)。

井深 ある指圧屋さんの話ですが、おっぱいが出ないのやら、お産を軽くするのやらの治療を実行して何百人という記録なんですよ。

競 西洋医学が東洋医学を無視したらまずいですね。

井深 全然別のジャンルの考え方をしないと。西洋医学の考え方で東洋医学を解釈しようと思うところに.....。私は武見さんに言ったんですよ。北里大学で東洋医学を大分やっているんですが、追跡すると、はりだろうが、お灸だろうが、全部西洋医学で解釈しようと思ってやっているの、あれでは限度があると思うんですよ。

競 情報がうまくマッチしないといけないと思いますね。

井深 しかし、マッチできないですね。発祥が全然違うんだから。

競 違うけど、体の中で起こっていることは説明できるはずですから。

井深 それが説明できないのが、いまの脳の.....。

競 それはまだ今後の問題で。

井深 ええ、そうですね。しかし、それが全然五里霧中じゃなしに、少しずつ.....右脳、左脳だって、少しずつ解明されてきましたからね。これから右脳の育て方を最初にやるんだということをもっといわなければいけない。

カヨ子 私は、脳の発達も子供に任せるべきだと。お母さんがおもちゃを与えることひとつにしても、右手にばかり持たせやすいように置きなさんなということです。お母さんが非常に右ききがきつかったら、どうしても右の方にいきます。そういう人は、特に左を主としてお母さんが使うようにすればいい。

井深 左脳、右脳は、それこそ先天的に、左脳は何を考え、右脳は何を考えるということなのか、それともだんだん集約して、そういうことはこっちに任せて、こういうことは右脳になって、後天的にそうなっていくのか、そこら辺はどうなんですか。

競 それはいまのところは遺伝的な要素が非常に強いだろうと考えているんです。どうしてかということ、脳のかっこうが胎児のときに違っているんです。

井深 形が違っていませんか。

競 はい。

井深 シンメトリーじゃないんですか。

競 シンメトリーですけども、たとえば言葉を出すのに関係したところは左脳が大きいですね。ですから、それは恐らく遺伝的に決まっているんだらうと思います。

井深 肉体的には遺伝しますよね。

競 もう一つは、右脳、左脳と言われているのは、右が何で、左が何とはっきり分けているんですよ。実はそうじゃなくて、やや分業がある。

感じる力を

いま、左脳の教育みたいなことが世間で言う教育の対象になっているわけですよ。しかし、お話を伺っていると、直感力を育てることに相当力を入れてやってらしたと思うんです。たとえば数に強くするための教育をするのならば、その土台づくりとして何をすればいいのか、そこいらを小さいときのことからお話していただけないでしょうか。

カヨ子 そこまでいく前に、たとえばアイロンが熱いときに、さわらなければ、赤ちゃんはどれが危険かわからないから、さわって熱いということわかりますね。でも、温度を肌で感じますので、そこへいく前にやめるとか、ストーブに後ろ向きで座っていても、温度の差がわかって、それが危険だと離れるようになるとか、そういうようないろんな条件を与えながら、機会を与えて教えていくと、できるんじゃないかという気がします。

競 直感力、予測する能力ですね。

井深 初めはいま言われたように、人間は何を感じるかという、よく感じられる人間にしておきさえすれば、何にでも感じられるわけなんでしょうね。

カヨ子 本当に感じるという五感をみがいていって、それをしていると、副産物で六感が出てくるとい感じですよ。

井深 知るんじゃないに、感じることなんですよ。

カヨ子 いまの核家族で一人っ子ですと子供が何でもひとり占めできるけれども、あれはいけない。親にも半分くれと言って欲しいです。半分にさせて、それで、お母さんの方が小さいと文句を言うんです。本当に微妙な差を小さいと言え、そうかなとよく見比べる習慣がつく。それから、青と赤とを見分けるのではなくて、ママが好きな青はあれだと。そうすると、あるとき、うちの子供が、「お母ちゃん、きれいかったよ」と言うんです、三つぐらいのときに、「ママの好きな青い色だったよ」と言うんです。これは表現の仕方がわからない。わからないけど見分けている。ママの好きなのはスカイブルーのちょっと白みがあったのだというのがわかっていくんです。感覚としてはっきり子供に植えつけているんです。微妙で口では言えない。そういうことが大事です。

競 数学に強くする場合は、算数から始まってはだめなんです。重いとか軽い、大きいとか小さいと感ずることなんです。

井深 われわれはごくわずかな違いがわかるでしょう。相当微妙などっちが重いかということが、あんなのはいつ一体養われるんでしょうか。あまり経験していないでしょう。

カヨ子 そんなことないですよ。

競 小さいときにやっているんです。ですから、それをもっと積極的にやれということですね。

お母さんの感応力

井深 アフリカのどこかで赤ちゃんをズタ袋に入れて養うんですが、生まれて一週間たったら、おっぱいだの大便でそれを汚すのはお母さんの大変な恥だという、そういうところがあるらしいんですよ。そういう勘が大切ですね。司葉子さんが男の子を生んで、忙しくて自分でやれないから、聖路加の婦長さんだと思んですが、専属に面倒をみてもらったら、おしめを大便で汚したことは一回もなかったそうです。

カヨ子 私なんか四カ月でおしめをはずしました。

井深 そこら辺のおしめをどうやってはずすかということは重大問題で、カヨ子さんは百枚おしめをこしらえたということが書いてあるんだけど、そこを少し……。

カヨ子 温かい間にかえることが大事ですね。おしっこが出たてのホカホカの湯気のときに何回かえられたかという成功率が問題ですね。

競 大便はある程度なれたら予測できますね。

カヨ子 予測できます。

井深 それがわからなきゃお母さんの資格がないと言っては悪いけれども……。

カヨ子 やはり子供の体質で軟便系と硬便系があるんですよ。私のところは、はからずも二人が軟便系と硬便系でした。排便のしつけでも硬便系と軟便系は大分違ってきます。

競 さっきの話は、私は一年か二年前に幼児開発の雑誌に書いたんですけども、途上国のアフリカの話なんですけど、そこのお母さんというのは動物的なそういう感受性を持っている。体につけてしょっているの、接触の具合からもうおしっこが出るなとか、わかるんだそうです。ところが、工業を重ねた国とか、特に都会のお母さんたちは……。

井深 そういう感受性が……。だから、五感以上のあれですよ。

競 それはアフリカだけではなく、ほかのインドだとか、いろんなところについても。たとえばある人はインドの農村に行ったら、ちっとも赤んぼうが泣かないと。クラウスさんが言っていたんだけど、それは泣く前にわかるから泣かせないんだと。あのときクラウスさんの話では、ジャングルの中で赤ん坊が泣いたら獣に食われるからだということでした。それから、インドネシアの未開人の話でも、それは別の人の話ですが、原始的なお母さんはセンシティブィティを持っていないんだと。そういうものを、文明を重ねたお母さんたちが失っているんじゃないかということです。

カヨ子 ひどいになると、三十分一回おむつをかえるのがいいとか、“二回ぐらいはいけます、

むれない、漏れない、紙おむつ”なんてやるんですもの。そんなことをわきで宣伝されたら……。

井深 先日スウェーデンでドシャトーという人に出会ってきましたよ。生まれてから二十四時間の処置でその人の一生は決まるということで、生まれて五、六分して大体処置したら、それで十五分間だけ抱いた子供とお母さんをずっと七年間トレースしていて、相当な人数を調べたんです。全然違うんですよ。一遍だけですよ、十五分間というのは。生まれて五、六分たって。生まれた直後の方がもっといいのかもしれないけれども。

カヨ子 私、アメリカでお産したとき、私の腹の上で全部やりました、赤ちゃんの処置を。フワフワやって、あっ、ぶさいくな子だなと思って見てました（笑い）。へその緒も全部。

井深 ずいぶん前のことですよ。十何年前ですか。

カヨ子 ええ。アメリカでしました。オレゴンです。だから下の子もそれなんです。

井深 日本ですか。

カヨ子 三井厚生年金病院でやったんです。

競 ですから、赤ちゃんは生まれたら母親のそばで育てるべきですね。これは絶対大事なことです。日本でそれをしてもらおうと思ってもだめですね。

井深 大分ふえてきたんじゃないですか、希望によってはやるという病院が。

競 お母さんが、自分が生む病院をきめるときに、ちゃんとそういうことをやってくれるところへ行くことですね。

井深 ところでドシャトーは余り有名じゃないんだけど、だんだん認められてきているという感じね。おもしろいのは、十五分間やったエフェクトが男の子の方に大きくよくあらわれるんですよ。女の子にはそれほどじゃないですけどね。

競 母親対男の子ということで……。

井深 そちら辺は解析されていないんですがね。それからお母さんの態度が全然違ってくるんですよ。泣き声に対してどう反応するか、そばで寝てる子を何遍あやすとか、非常に細かい観察をずっとやっているんですけど、それをしたお母さんとしらないお母さんとで全然態度が違うんですよ。それも初産の方がエフェクトが大きい。

カヨ子 私なんか、一人は夜型で、夜よく飲むんですよ。その子に起こされたことがないですね。その子が欲しがるときに自然に目が覚める。やっぱり私の母乳の出方も夜、張りますからね。

井深 それで、弟さんになったらガラッと変わっちゃうんですか。

カヨ子 弟は寝たら十時間でもぐうぐう寝る方のタイプですから。私も起きないです。それこそテレパシーですよ。

井深 だけど、お母さんのリズムを赤ちゃんがもらおうと書いてあるね、物の本には。

カヨ子 それもあるし、相互なんですよ。歩み寄れるんですよ、それは。

井深 この辺がポイントだな。そこいらを気づかせなきゃならないのがわれわれの仕事だと思うんですよ。

カヨ子 お母さんが勘が悪いからというような顔をしていたら、もっと勘の悪い子供ができちゃいます。だから、そこら辺は使命感だとか情というもので開発していかなきゃいけない。昔だったら、たくさん生んでいるからいろんな経験者に聞けます。でも、二人しか生めないんだから、みがき方を自分で工夫しなくちゃならないし、子供はいろんなもので花開きますでしょう。素晴らしい宝を自分で好きなようにできるんです。どんな育て方をしても、だれにも文句は言われませんよ、子供は。こんな素晴らしいことはないんだから、やりなさいと言いたい。

井深 それには、いままでの育児学とかそういうもので足りないところがあるので、それを一生懸命知らせていくことがわれわれの使命だと思うんです。しかし「赤ちゃん教育」というのはいやなんだなあ。

カヨ子 いやなんです。ひっかかるんです。

井深 教えないで育ててもらわないと困るんでね。

カヨ子 私は手かけ、暇かけ、目かけと言うんです。だからやっぱりみがくんですね。赤ちゃんのみがき方を教えますという感じですね。

井深 カヨ子さんが言われた傑作をこさえるんだという、そういう考え方、ぼくの『お母さんへの贈りもの』にも書いてあるんだけど大傑作をあなたの思うままにつくれるんですよという、その夢というものをもうちょっと強く与えたいと思うんですよね。人間の傑作をこさえたらこんなにすごいことはないということを植えつけていくよりしょうがないでしょうね。

カヨ子 お母さんは自分の子を持ちたいと思わないとだめなんです。

井深 自分で自分の育児学をつくり出さなきゃうそなんです。

カヨ子 好きな男の子じゃないんですよ（笑い）。自分の子なんです。十カ月も腹の中に持っているんですから、私の子ですよ、本当に。だから、私の子を育てるんだということですね。そういう気持ちを持たなければ、子供なんかつくらないでおきなさいというような気がします。

おわり